ISSN 2189-8731

Kagoshima University International Center for Island Studies

島嶼研だより

No.75　鹿児島大学国際島嶼教育研究センター　2018 年 3 月

主な記事

島嶼研究と標本のフィールドデータ（仲谷英夫）　p1
国内客員研究員フィールドレポート　p3
「ウイルス研究者、珍マダニを求め島を歩く」（松野啓太）
「水田跡を掘る」（新里亮人）
「高隈演習林での捕まえたものは？」（鳥飼久裕）
学生奮闘記「なぜ島に関心をもつのか～島を活性化する意義」（古澤典子）　p6
フィールドこぼれ話「「端島」であるということ―災害への対応力、災害からの復元力」（佐藤宏之）　P17
連載　とうがらしに旅して
第十六回　「酒と唐辛子の関係（一）餅麹」（山本宗立）　p18

島嶼研究と標本のフィールドデータ（特に標本ラベルについて）

出版広報部会長・兼務教員（理学部）　仲谷英夫

島嶼研究のみならず、動物、植物、岩石、化石などの標本を扱う場合、フィールドデータについてはその標本ラベルに記載されているものが基本になります。もちろん、博物館などでは収蔵している標本に関する情報は、標本台帳などで管理され、その中の最小限の情報が標本ラベルに記載されているわけですが、標本と一緒に見ることができるということでは、標本ラベルにまさるデータはありません。

標本ラベルにはさまざまな形式のものがありますが、鹿児島大学理学部の地球環境科学科（旧地学科）のラベルを見ると、厚紙で記載内容は、標本番号、分類名、産地、層準（地層名や時代名）、採集者、文献となっています（図 1）。

基本的にはこのような情報が最低限必要ですが、これだけでは，標本に関するフィールドでの情報が少ないので、ケニア国立博物館ではフィールドでのデータを決まった様式のシート（図 5 参照）に記入して、標本一つずつにつける規則になっていました。

このシートには通し番号がついており、標本のフィールド番号、博物館での登録番号や、採集日、発見者名、記録者名、化石の分類名（このシートでは、科、族、属，種）、部位（歯や骨の種類）だけでなく、現地での産状（化石を含んでいる地層の種類など）や、採集方法（表面採取か、ふるいによる採取か、地層から直接発掘したかなど）を詳しく書くようになっていました。その後、GPS などを使うようになり、それらのデータ（緯度、経度、標高など）や産地番号を新しく含めて記入するシートを、日本

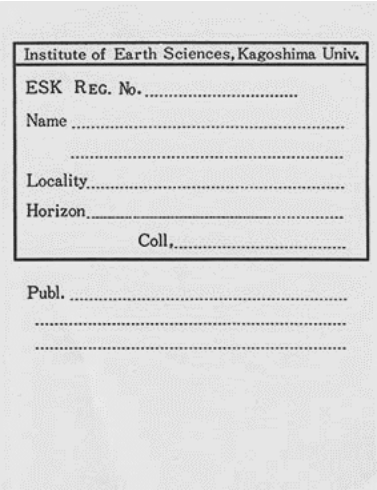

Institute of Earth Sciences, Kagoshima Univ.
ESK REG. No. .....
Name .....
.....
Locality .....
Horizon .....
Coll. .....
Publ. .....
.....
.....

図 1 標本ラベル（鹿児島大学旧地学科）

の調査隊は作成し、標本に添付するようになりました。

その例が、この標本で、フィールドでのシート、カードとしてファイルされるラベル、標本につけられるラベル、研究者によるコメントシートの 4 枚が標本と同じビニール袋に入れられていました（図 2）。

ところが、最近、博物館を訪れたところ、標本には登録番号と所蔵棚番号を記入した細長い厚紙が添付されているだけになっていました（図 3）。これは、フィールドデータがどうなったか分からないので大変と博物館のスタッフに聞いたところ、全てのラベルやコメントシートは画像データとしてデータベース化しているところだということでした。

図 2　ケニア国立博物館の標本と同封されたラベルなど

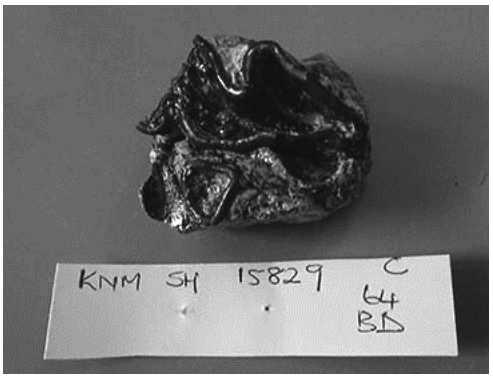


図3　ケニア国立博物館の標本と標本番号ラベル

そこで、標本番号から標本に関するデータを検索してもらったのですが、そのデータが収蔵されているコンピュータが 1 台に（ネットワーク化されていなく）、標本番号に対応する全てのシートの情報が画像データとして保存されていました（図 4）。そこで、モニター画面にデータを表示してもらいましたが、プリンターに印刷できない（そのようなシステムになっていない）ので画面をデジカメで写して、その情報を保存するということになりました（図 5）。このように、歴史の長い博物館などでは、標本に係わるいろいろな情報が、統一した形で保存されていないため、紙に書いた情報をそのまま画像として、保存するという形になったようです。

しかし、このようなシステムは、発掘（発見）した研究者だけでなく、その標本を研究しよう

図 4　標本データを検索している様子

とする全ての研究者が、さまざまな（フィールドデータを含む）標本情報にアクセスすることを可能としており、新たな研究の展開が期待できます。

島嶼研究だけでなく、ほとんどの標本情報は研究者個人の手元にあることが多く、博物館でも標本台帳まで遡っても標本ラベル以上の情報が残されていることは多くありません。
ケニア国立博物館のように、アクセスに少々難はありますが、あらゆる研究者が情報に接することが可能なシステムを作ろうとすることは重要です。今後、標本情報（フィールドデータを含む）の管理、運営を考える上で、貴重な例となるのではないかと考えます。

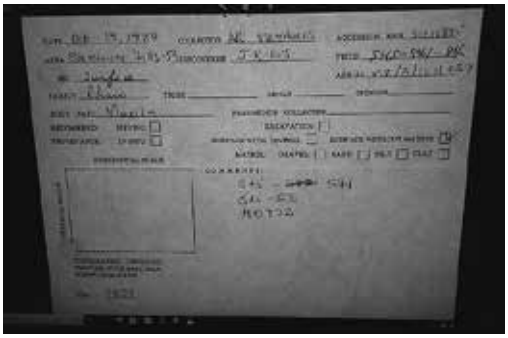


図 5　モニターに写し出された標本シート

国内客員研究員フィールドレポート

ウイルス研究者、珍マダニを求め島を歩く

北海道大学大学院獣医学研究科　松野啓太

ウイルスの研究はみなさんの想像以上に地味です。一番大きな理由として、研究対象が見えない、というのがあります。共通機器室に行って、電子顕微鏡という特殊な顕微鏡を使わないと、ウイルスそのものを観察することができません。なので、研究者たちはあの手この手でウイルスを検出できるようにして研究しているわけですが、どの方法でも「生の」「今そこにある」ウイルスを見ることはできません。せいぜいが「ああ、この培養液はウイルスで満たされているんだなぁ。見えないけど」程度で、顕微鏡をのぞきこんで「これは・・・大変なことだぞ・・・新種のウイルスだ！」と大騒ぎするなんて、実際にはあり得ないのです。

見えないなりに調べると、この世界には想像以上にたくさんのウイルスが存在していることが分かります。病気を起こすウイルスだけではなくて、何だかよく分からないウイルスが身の回りにうようよしているのです。私は、この正体不明のウイルスたちを先回りして見つけ、将来の病気の発生に備えるために研究をしています。特に、マダニの中に潜むウイルスの早期発見を進めています。マダニは草むらや藪、森を歩くと付いてくるやっかいな８本足の節足動物で、いつの間にか血を吸っている困りもの。日本国内どこへ行っても見ることができます。国内では、ウイルスの運び屋（ベクター）としては長らく注目されてきませんでしたが、SFTS やダニ媒介性脳炎といったウイルス感染症による被害が報告されるにつれ、マダニ咬傷のリスクが再認識されはじめてきました。

奄美群島においては、マダニ中のウイルス調査はされていますが、ダニ媒介性のウイルス感染症の報告はありません（日本紅斑熱の報告は

チームマダニ集合写真。白い旗がマダニ採集の道具です。奄美大島には、ほぼ一人で調査に来たため、ハブに噛まれたらという不安と戦いながらのマダニ採集でした。

ありますが）。私自身の調査でもウイルスはこれまで検出されていません。一方で、この地域にはクロウサギチマダニ（アマミノクロウサギの特異的寄生者）に代表される固有のマダニ種が存在しており、それはつまり、まったく新しいウイルスがいるかもしれないという期待を私に抱かせるのです。また、蚊と違って自らはほとんど移動しないマダニ中のウイルスは、島で独自の進化を遂げているかもしれません。研究室で持ち帰った珍しいマダニを一匹ずつすりつぶしながら、ひょっとしたらを地味に追い求める日々です。

マダニは写真のような白い旗を使って採集します。この旗で草むらや落ち葉の上をなでると、動物が通ったと勘違いしたマダニがくっついてくるという寸法です。野山で白い旗を地面に向かって振りながら、日本国内はもちろん、海外にも調査にでかけています。きっと今年も、地球のどこかで、新しいウイルスを探してうろうろしていることでしょう。島嶼研にお世話になった一年間では奄美大島を三度も訪れましたが、いつかまた、ここにしかいないマダニを求めて戻って来たいと思います。

水田跡を掘る

伊仙町教育委員会　新里亮人

徳之島の伊仙町では、県営畑地整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査が進められている。土木工事の工区内に周知の埋蔵文化財包蔵地がある場合、工事の着手前に当該文化財の記録調査を行なうことが文化財保護法に定められており、伊仙町では４名の専門家がそれぞれの発掘調査に従事している。町内の畑地整備事業工区内からこれまでに２例の水田跡が発見されており、平成 29 年度の調査では新たに３例が加わった。一つの自治体としては調査例に恵まれているので、以下にこれらの成果を速報的に紹介してみたい。

奄美・沖縄地域ではグスク時代と呼ばれる約1000 年前頃には農耕が普及していたことが定説となっているが、イネを育てた水田はどのような場所でどのように構築されたのであろうか。これまでの成果によれば、伊仙町で発見された水田跡は、川や沢に隣接する場所に位置し、石灰岩段丘上に刻まれた細い谷地に営まれることが多い。灌漑によって河川から水が引ける平地というよりは、自然に水が集まる付近と比べて低い土地が選ばれたのであろう。近隣の住民によると、干ばつ時には複数人で川まで下りて、バケツリレーで水田に給水したとのことだったので、川の近くに水田を作るのは理に適った土地利用であったことがわかる。

水田跡の発掘では、谷地の土を切り盛りして階段状の平坦面を設け、畔によって水をせき止めていたことが明らかとなった。畔の中には、補強のためか周辺にある石灰岩が無数に埋め込まれていた。町内の上面縄集落にある大瀬ノ嶺遺跡の調査では４筆の水田が南北方向に段差をもって連結し、畔の縁には入水口も確認された。水田内からは土器、カムィヤキ、中国陶磁器といったグスク時代を代表する遺物が出土するが、遺構内の土壌を袋詰めにして持ち帰り、水田と関連する動植物の回収に備えることとした。水田としての機能を客観的に証明するためには自然科学的な分析も欠かすことはできないからである。

大瀬ノ嶺遺跡発見の水田跡は、後の時代（江戸時代頃か）、畑地に転用され、この地は近年までサトウキビ畑として機能していた。表土となる畑土の直下には、水田跡の一部を壊して石灰岩を充填した暗渠が設置されており、水が集まりやすい谷地の水はけを良くする工事が行なわれたことがわかった。このようにみれば、大瀬ノ嶺遺跡では、水田から畑地への転換過程すなわち土地利用の変遷と工法も明らかとなったことになる。

伊仙町では農業生産額の向上が町政の重点施策ともなっており、遠い過去における農業の実情を知ることは、将来にわたる農政のあり方を考える上でも役立つであろう。文化財を学問研究のみでなく現代社会に活かすため、水田跡の発掘調査で得られた知見や先人の知恵を広く普及することも調査担当者に与えられた使命なのかもしれない。

大瀬ノ嶺遺跡発見の水田跡

高隈演習林での捕まえたものは？

特定非営利活動法人奄美野鳥の会会長　鳥飼久裕

2017 年度の客員研究員として、4 月と 11 月に一週間ずつ鹿児島大学農学部附属高隈演習林で鳥類の調査をさせていただきました。目的は大隅半島と奄美群島の渡り鳥の連続性を検証すること。春の渡りのときには南西諸島から飛び立った鳥が大隅半島を経由して日本全土へ北上、秋の渡りのときには日本全土から集まった鳥が大隅半島を経由して南西諸島へ南下するのではないかと仮説を立て、中継地の大隅半島で標識調査をおこないました。

この調査のためには、かすみ網で渡り鳥を捕まえ、足環をつけて放鳥する必要があります。ところがどうしたことでしょう。渡り鳥があまり捕まらないのです。高隈演習林があるのは垂水市の高峠付近、大隅半島のほぼ中央というロケーションです。もしかしたら、調査地の選定を間違えたのかもしれません。渡りの状況を正確にキャッチするには、大隅半島の先端である佐多岬に近い場所で調査をしたほうがよかったとあとから気づきました。

結局、一年限りの客員研究員という立場での研究は中途半端に終わってしまい、なんらかの形で再度挑戦したいと考えているのですが、渡り鳥が捕まらない代わりに意外な獲物が捕まるという予想外の成果もありました。春はコウモリがたくさん捕まり、秋はスズメバチが次々とかすみ網にかかったのです。コウモリには網を噛み切られるし、刺されないようにスズメバチを外すのには難儀するし、ふだんできない勉強をさせていただきました。

かすみ網にかかったキクガシラコウモリ。はじめて捕まえました。

学生奮闘記

なぜ島に関心をもつのか～島を活性化する意義～

古澤典子（鹿児島大学農学研究科）

離島について考えるようになったのは、大学院で島嶼学を受講し始めたごく最近です。私の出身の福岡県にも島はありますが、多くは 1 日 1 便以上船が出ており距離も近いため、離島の認識はあまりありません。また、離島として思い浮かぶ屋久島や石垣島は観光地であり、そこの生活や文化を深く考えたことはありませんでした。島嶼学の講義で三島村の薩摩硫黄島、十島村の中之島、ミクロネシア連邦を訪れ、島の生活者の視点を知ったことで様々な気付きがありました。

硫黄島は、硫黄岳で発生するガスの影響で農業が困難な島で、島の生活は自給自足に近いと思い込んでいた私は戸惑いました。しかし、温泉成分で独特の色に染まる港や、波をかぶるくらい海の近くに温泉がある、自然豊かな島で、小さな島でも観光業ができる可能性を感じました。中之島は、牧場でトカラ馬が放牧され、穏やかな時間が流れる島でした。しかし、島唯一の診療所の看護師の方から話を聞き、医者がおらず設備も乏しい島の医療の厳しさを知りました。どちらも短い滞在でしたが、島の人と触れ合うことができ、とても勉強になりました。昨年の夏にはミクロネシア連邦へ行き、チューク州の中心ウェノ島とそこから小型ボートで 1 時間ほど離れたピス島にそれぞれ 2 泊滞在しました。私は初めての海外で、日本と異なる環境すべてが刺激的でした。特に印象に残ったのはピス島での体験で、ここで初めて「ビンロウ」を知りました。ビンロウは島の大人が頻繁に噛む、嗜好品の中でもとても身近なもので、楽しさはあまりわかりませんでしたが、相手を理解するために文化を共有することはとても大切だと感じました。

私が訪れたこれらの島、特に面積の小さな離島は、人口減少とそれに伴う少子高齢化や高等教育が受けられない、医療が受けにくいなど共通した問題が多くありました。しかし、授業後の先生の一言で重要なことに気付かされました。これらの問題は、日本の過疎地域でも共通する問題だということです。離島でなくても、交通の便が悪い地域や買い物がしにくい地域、少子高齢化が進む地域は至る所にあります。離島特有の問題はほとんどなく、日本の地方でも同じ問題があると気付けたことは、大きな収穫でした。

最後に、いくつかの島を訪れて感じたのは、離島は「モノの豊かさ」はないけれど「心の豊かさ」がある場所だということです。それが私なりのタイトルの答えです。多くの人に各離島のおもしろさを知って欲しいし、私ももっと多くの離島を知りたいです。そして、島嶼学の講義を通して学んだことを 4 月からの社会人生活で活かしたいと思います。

海のすぐそばの温泉（硫黄島）

ピス島近くの無人島にて記念撮影

鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「島の声、島の歌　― 奄美の「うた文化」を考える」

平成 29 年 11 月 19 日（日）に鹿児島大学重点領域研究（島嶼）シンポジウム「島の声、島の歌　― 奄美の「うた文化」を考える」を奄美市 AiAi ひろばにおいて開催いたしました。当日は多数の皆様方に御参加いただき、盛会となりました。

趣旨

梁川英俊氏（鹿児島大学法文教育学域法文学系教授）は、これまで鹿児島大学で行ってきた奄美島唄関連のイベントを振り返りながら、鹿児島本土における奄美島唄を紹介します。またフランス・ブルターニュ地方の民謡のあり方と比較しながら、奄美民謡の未来を考えます。

小川学夫氏（鹿児島純心女子大学名誉教授）は、60 年代に奄美に移住し、セントラル楽器で島唄のレコードを制作しながら島唄を研究してきました。今回はそれらのレコード制作について、これまであまり語られなかった興味深い逸話を交えて語ります。

指宿正樹氏（セントラル楽器代表取締役）は、2010 年から「奄美紅白歌合戦」という新民謡を中心とした歌のイベントを立ち上げています。今年で 8 回目を迎えるこの企画がどのようにして生まれ、また発展してきたのかを主催者の目から語ります。

楠田莉子氏

麓憲吾氏（ＮＰＯ法人ディ代表理事）は、90 年代から数々の音楽イベントの仕掛てきましたが、2007 年にはコミュニティＦＭ「あまみエフエム・ディ！ウェイヴ」を開局しました。ラジオというメディアで、島のうた文化がどのような可能性をもっているのかを語ります。

前山真吾氏（唄者）は、現在大島でもっとも活気のある八月踊りを実践していると言われる、浦上集落の八月踊りがいかにして復興されたのかを、浦上青年団の一員として語ります。

楠田莉子氏（唄者・シンガーソングライガー）は、奄美島唄の若手の代表的な唄者で、シンガーソングライターでもあります。この二つの活動をどのように両立させようとしているのか、ライブパフォーマンスを交えて語ります。

梁川英俊氏

討論の様子

島嶼研シンポジウム
「島々とアジア・太平洋戦争―記憶の継承・保存・活用を中心に―」

平成 30 年 3 月 4 日（日）に島嶼研シンポジウム「島々とアジア・太平洋戦争―記憶の継承・保存・活用を中心に―」を鹿児島大学郡元キャンパスにおいて開催いたしました。当日は多数の皆様方に御参加いただき、盛会となりました。

趣旨

アジア・太平洋戦争から 70 年以上が経過した現在、戦争を直接経験した世代の方々が少なくなりつつあり、当時の状況を知る「生」の声が失われていこうとしている。それゆえ、近年では戦争体験をいかに記録し、戦争を知らない世代に継承していくのかという問題について関心が高まっている。

周知のとおり、アジア・太平洋戦争が展開される中で、日本は朝鮮半島や台湾において植民地統治を行い、「帝国」としてアジアの広い領域に影響を与えていた。日本の周辺に存在する島々は、「帝国」の領土が拡大する過程でその一部として取り込まれていくこととなった。その結果、島嶼は政治的にも経済的にも「帝国」による支配をうけるとともに、その周辺性がゆえに戦況が変わると容易に最前線の戦闘地にもなりえる場所でもあった。そもそも、島嶼という地域は、その地理的な条件も相まって政治経済的中心部から遠く隔たれている場合が多く、その分政治的にも経済的にも不利な条件におかれている。ましてや、戦争という非常事態の中ではさらに厳しい条件下におかれたことが容易に予想される。それゆえ、島嶼社会でどのように戦争が経験されたのかという問題について考えていくことは、戦争と社会の関係を考える上でも重要な課題のひとつだといえる。以上を踏まえて、本シンポジウムでは、島嶼地域において戦争がいかに経験されてきたのかという問題に焦点をあててみたい。今回は、鹿児島県の離島である奄美大島や小笠原諸島、そしてかつて日本統治下にあった済州島にてフィールドワークを行う研究者から最新の研究成果を報告してもらう。その上で、戦争体験の保存と活用という問題や、島嶼と戦争の関係について理解を深める機会としたい。

1) 済州島の日本軍の戦跡地と住民の戦争記憶―Alddreu 飛行場を中心に

趙誠倫
(鹿児島大学国際島嶼教育研究センター)

韓国済州島には、日帝末期、日本軍がつくった巨大な軍事施設が陸・海軍の飛行場、砲台、塹壕、高射砲陣地、訓練場及び監視哨所、避難所、陣地坑道、特攻隊基地、飛行機掩體壕、弾薬庫、爆弾埋立地など多様するだけでなく、ほとんどが原型のまま残っている。この場所は、済州道民らが見るたびに強制動員された痛い記憶の場所、否定的な場所だ。でも同時に済州島の戦争遺跡は、日本軍が済州島を中心に、いかに戦争を準備しており、住民をどのように動員したかを分かるようにしてくれる媒介体である。したがってこの媒体を通じて戦争の実状を正確に理解できる教育プログラムを作るなら、平和教育の資料になることもできるだろう。

今日、済州島では戦跡地をめぐる対立が進行

趙誠倫氏

中だ。代表的な戦争遺跡であるアルトゥル飛行場を 1988 年に韓国空軍が使用しようと計画した。しかし住民の反対運動が起き、白紙化された。その後、済州島当局は、日本軍が残した施設を近代遺産に指定して、この地域を平和公園として造成しようと計画を立てた。しかし、軍隊は依然としての軍飛行計画を推進し、対立が続いている。済州島は東アジアの戦争基地の一つに変わっている。一方、市民運動家たちは、住民たちに戦争の記憶を喚起し、基地反対を訴えている。この発表では、アルトゥル飛行場を中心に、戦争遺跡の活用案をめぐって対立している済州道の状況を通じて、住民たちの戦争の記憶の再生問題を考える。

2) 硫黄島民（東京都）の戦争体験とその記憶―強制疎開、地上戦動員、故郷喪失

石原俊
（明治学院大学社会学部）

硫黄島と北硫黄島は、19 世紀末から 1944 年の強制疎開までの約半世紀間にわたって日本帝国の「南洋」入植地のひとつとして発展していた（南硫黄島は住民なし）。両島合わせた人口は、最大時に約 1,200 名を数えた。

だが 1944 年、南洋群島に侵攻し始めた米軍は、日本軍の飛行場がある硫黄島の奪取を決定した。大本営の側も、本土防衛の時間稼ぎのために硫黄島での地上戦を想定した。硫黄列島民 1,254 名のうち 1,094 名が、本土に強制疎開させられた。いっぽう、硫黄列島に住んでいた

石原俊氏

16 歳～60 歳の男性のうち 160 名は、強制疎開の対象からも除外されて軍務に動員された（北硫黄島は全員が強制疎開の対象となり被徴用者はなし）。

1945 年 2 月 19 日、米海兵隊は硫黄島に対する上陸作戦を開始した。硫黄島では 3 月末に日本軍の組織的抵抗が終わった後も夏期まで、米軍による掃討作戦が継続した。地上戦開始まで硫黄島に残留させられた島民被徴用者 103 名のうち、生存者は 10 名であった。

日本の降伏にともない、米国は奄美諸島、沖縄諸島、小笠原群島などとともに、硫黄列島を軍事占領下に置いた。1951 年、サンフランシスコ講和条約によって、日本は再独立を獲得するのと引き換えに、米国が小笠原群島とともに硫黄列島を引き続き軍事利用することを追認した。米軍は硫黄島に核弾頭を秘密裏に配備し、島民の帰島を拒み続けた。

1968 年、小笠原群島とともに硫黄列島の施政権が日本に返還された。ところが日本政府は、硫黄島を自衛隊に軍事利用させる目的で、北硫黄島を含む硫黄列島の島民に引き続き帰郷を認めなかった。硫黄列島民は 2018 年時点で、74 年にわたって故郷喪失状態に置かれている。

硫黄列島民は、日本の総力戦の〈捨て石〉として利用され、さらに冷戦下における日本の再独立・復興の〈捨て石〉として利用されたといえる。本報告では、硫黄列島民の「戦争経験」と「冷戦経験」から、20 世紀の日本と太平洋世界を問い直してみたい。

3) 奄美大島・瀬戸内町の戦争遺跡

鼎丈太郎
（瀬戸内町教育委員会）

瀬戸内町では、近代以降の戦争に伴う軍事施設跡が、現在も数多く残されている。そして、その保存・活用について、地域住民はもちろん、諸分野からも関心・要望が高い。

全国的にも近代以降の戦争遺跡の注目度は高く、文化庁は『特別史跡名勝天然記念物及び

史跡名勝天然基準』を一部改正し、「史跡」の指定基準に「戦跡」を加え、対象年代を第二次世界大戦終結頃までと、その範囲を広げる事とした。その流れは、広島県の原爆ドームの国史跡指定へとつながり、1996 年にはユネスコ世界遺産に登録され、戦争遺跡を「文化財」として保存・活用していく必要性が広く認識される契機となった。

瀬戸内町でも、文化庁国庫補助事業として 2014 年～2016 年度にかけて、町内の近代遺跡の実態を把握する為の分布調査を行い、206 施設の軍事施設跡を確認する事が出来た。しかし、未調査地が存在する為、今後も分布調査を継続する計画である。

現地調査については、基本的には写真及びＧＰＳデータの収集を行い、町内の軍事施設跡の分布を把握する事を第一の目的とした。また、砲台等一部の遺構については遺構の略測図を作成したが、素掘りの壕は安全面を第一に優先する事から内部の確認は行わなかった。遺物は調査実施範囲において表面採集出来たもののみ採取を行った。

今回の報告では、確認できた軍事施設跡を下記の５期に分け報告を行った。

Ⅰ期：奄美大島要塞開庁以前
Ⅱ期：奄美大島要塞開庁後から太平洋戦争直前
Ⅲ期：太平洋戦争前半（戦争開始から旧日本軍の占領範囲が最も広大だった期間）
Ⅳ期：太平洋戦争後半（太平洋戦争の戦況が不利となった時期から終戦までの期間）
Ⅴ期：終戦後（終戦後から現在までの期間）

鼎丈太郎氏

Ⅰ期は、1895 年に構築された佐世保海軍軍需部大島支庫（水溜）跡等があり、赤煉瓦造りの構造が特徴である。Ⅱ期は、1921 年に構築された奄美大島要塞関連の軍事施設跡が挙げられる。1919 年の要塞整理要領に則り要塞施設の建設が行われるが、ワシントン海軍軍縮会議により工事が中断した為、備砲は行われなかった。Ⅲ期は、陸・海軍の様々な軍事施設跡が建設されるようになる。Ⅳ期は、物資不足と敵の上陸を想定した施設構築が行われた為、素掘りの壕など臨時的な軍事施設跡が多い。また、震洋艇など特攻用の武器が配備されるようになる。Ⅴ期は、武装解除により砲台や弾薬は廃棄されたが、構築物の多くは破壊をまぬがれる。しかし、生活物資が不足していた為、木造兵舎は共有建物として転用され、鉄筋コンクリート建造物は鉄など金属を抜き取る為に一部が破壊され、現在では消滅した近代遺跡もある。

今回、取り上げた近代の軍事施設跡は、歴史的・残存状況・遺構の特徴から重要なものとして、今後の文化財指定も念頭に入れた取り組みが必要となってくる。一方、今回は調査及び資料不足により取り上げられなかった近代遺跡や、継続調査により発見される可能性がある施設跡についても、今後、詳細な調査を行う事によりその重要性が認識される可能性が高い。よって、こうした近代遺跡（戦争遺跡）を文化財保護法における埋蔵文化財として、記録保存も含めた開発対応を行う事が望ましい。瀬戸内町教育委員会では、今後も広く諸分野と連携・協力を行い、近代遺跡調査を継続的に実施して行く予定である。

4) 戦争の＜記憶＞を未来につなぐ

佐藤宏之
（鹿児島大学教育学部）

1945 年の日本の敗戦から 73 年という歳月が経過した。戦争体験世代や戦争や戦時の生活を少しでも記憶している世代は少なくなり、体験

や証言として戦争・戦時が語られる時代から、非体験者からさらに次の非体験者へと継承される時代になった。

直接体験を持たない世代、戦争や植民地支配の過去を知らず、その史実を十分に　学んでこなかった世代が、戦争の〈記憶〉をどう受け継いでいくのか。今日の教育的・社会的課題といえる。

体験者本人の生の声で証言するということは、ここ数年以内に確実に不可能となり、歴史研究の基本である文字記録によってしか研究ができなくなるという状況がやってくる。体験者の消滅によって、文字記録主体の「普通」の歴史研究になってしまうことを、ただ指を咥えて見ているだけでいいのだろうか。むしろ、体験者の証言をこれからも活用し続けていく方法論を模索し、構築すべきではないか。

戦争体験者の証言を平和学習に利用することを通じて、「戦争の〈記憶〉を未来につなぐ」ための方法論を提起したい。

佐藤宏之氏

コメンテーターの西村明氏

国際島嶼教育研究センター研究会発表要旨

第 181 回　　2017 年 9 月 25 日

非感染者とコミュニケートする：太平洋地域における非感染性疾患の流行問題に取り組むためのメディア開発とコミュニケーション戦略

エヴァンゲリア・パボサキ
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

太平洋諸島民は、非感染性疾患（生活習慣病）の流行によって加速された健康危機に直面している。現在、この慢性的な状況はしばしば家計に重い経済的負担としてのしかかる。また、太平洋地域の死者の 70%以上は非感染性疾患によるものとみられている。グローバリゼーションや都市化によるプレッシャー、例えば、健康によくない食品（地元の食物生産の低下と塩分や糖分、脂肪の多い加工食品や輸入食品の増加）や飲酒、喫煙、運動不足などが非感染性疾患の増加につながっている。太平洋諸島民の間に見られるこうしたライフスタイルの変化が、肥満、糖尿病、癌、循環器系疾患などの非感染性疾患の流行をもたらしている。こうしたトレンドを逆転させるためには、コミュニティにおける十分な健康教育や健康に関する問題意識が不可欠であり、これこそが、現在、太平洋諸島全体に求められている。非感染性疾患の多く

が予防可能であるとすれば、健康促進活動は太平洋地域における非感染性疾患という問題の低減に重要な役割を果たすことができる。

本発表は、太平洋地域における非感染性疾患への対処という課題を、コミュニケーションの開発と社会変化という観点から評価し検証する。戦略的メディアとコミュニケーション構想（イニシアティブ）は非感染性疾患増大の要因とみなされる特定の領域をターゲットにできる。本発表では、国によってその対応がどう調整されているのかという事例を検証し、現在、太平洋諸島の国々で展開されている多様なメディアとコミュニケーション構想について考察する。

本研究は、コミュニカティブ・エコロジーと開発のためのコミュニケーションの原則により導かれたもので、コミュニケーションの全ての形態とモードを網羅する。そこには、コミュニティラジオ、情報通信技術（ICT）構想と伝統的なマスメディアに伴うコミュニティ対話のようなプロセスが含まれる。また、主な研究方法としては、はデスクワークにもとづいた調査、利害関係者へのインタビュー、太平洋メディアと通信専門家への調査が含まれる。回答者から明らかになったことは、非感染性疾患の慢性的性格により、コミュニティはしばしば彼らを死が避けられないか、あるいは自然な死に方として受け入れているということである。回答者は、また、健康コミュニケーションにおけるメディアの役割のより良い理解と、政府、NGO、ジャーナリストの間の連携が強化されることを呼びかけている。

本発表は、メディアにもとづいた非感染性疾患戦略を設計するときのいくつかの重要な試みや太平洋地域に独特の機会を強調する。国家横断的分析を結び付け、最良の実例のいくつかを含めることによって、本発表は太平洋地域における健康促進戦略のさらなる企画とデザインに関する情報を提供し、かつ支援するため、非感染性疾患の潜在的な解決策を探求する。

第 182 回　　2017 年 10 月 23 日

琉球国成立前夜の考古学的研究

新里亮人
（伊仙町教育委員会）

1429 年に成立した琉球国は中国、東南アジア、日本を結ぶ中継貿易によって繁栄した王国である。その成立過程の解明を目指す研究では、在地の土器や陶器、九州産および中国産の食器類の編年研究を基準に、村落や城郭の構造を分析・序列化し、その発展段階を明らかにする手法が採られてきた。研究史の上では、王都所在地である沖縄本島の考古資料が主な分析対象であったため、成熟した農耕社会の延長線上に王国の成立が位置付けられる発展段階的な歴史観が描き出されてきた経緯をもつ。一方、琉球国の版図内に治められた北側の奄美諸島、南側の先島諸島では発掘調査件数の少なさから本格的研究の開始が沖縄本島よりも遅かった

エヴァンゲリア・パボサキ氏

新里亮人氏

が、近年情報の蓄積が急速に進み、こうした地域を包括しながら琉球国成立史を再構築することは大きな課題となっている。

これを受け本研究では、グスク時代の琉球列島から出土する食器類の編年研究からそれらの生産、流通、消費の様相を明らかにし、当該期における経済状況の推移を考古学的に復元することを目的とする。対象資料は琉球列島各地の在地土器、九州産滑石製石鍋、中国産陶磁器、徳之島産カムィヤキで、九州島や中国における食器類の生産や流通動向を確認しながら琉球列島の独自性を示すとともに、各島嶼域の地域性を抽出することによって地域的な経済状況と社会の複雑化の関係性を検討していく。重層的階層社会であった三山時代、琉球国時代に至る社会の一端を交易の側面から明らかにしたい。

第 183 回　　2017 年 12 月 11 日

「学校芸能」の誕生とその展開―八重山諸島の事例を中心に―

呉屋淳子
（沖縄県立芸術大学音楽学部）

近年、学校教育のなかで民俗芸能が積極的に行われている。学校教育で教えられている伝統芸能を見てみると、その在りようは年々多様化しており、学校教育で民俗芸能の教育が導入される状況は、地域によってもさまざまである。たとえば、地域社会を主体として民俗芸能の継承を行うには、困難な状況となり、学校教育が民俗芸能の継承の一翼を担っている場合がある。本発表が対象とする八重山諸島は、地域社会だけでなく、八重山諸島の 3 つの高等学校のそれぞれの学校が主体となり、地域社会と相互に関わり合いながら民俗芸能の教育が行われている。そして、民俗芸能が地域と切り離されて教授されてきた訳ではなく、むしろ地域社会と密接な関わりを保ちながら行われていた。

呉屋淳子氏

このようなことから、本発表では、八重山諸島の歴史的、社会的、文化的背景を踏まえて、現代八重山における八重山芸能の継承の現状と展開を、現在、3 つの高等学校で行われている八重山芸能の教育の事例から明らかにする。

第 184 回　　2018 年 1 月 22 日

南洋群島の朝鮮人―ヤップ島地域におけるコプラ産業と朝鮮人―

趙誠倫
（鹿児島大学国際島嶼教育研究センター）

この研究はヤップ島地域で活動した朝鮮人商人たちがコプラ収集活動に従事したことを確認して、彼らを通じて南洋群島での朝鮮人の適応戦略を検討する。

韓国の濟州島に住んでいる高斗星氏は 1934 年生。ヤップ島で生まれ、7 歳まで住んでいたが、1940 年に家族と一緒に済州に戻った。その父高明黎は 1921 年に日本人の紹介でヤップ島に移住した。彼はそこで店を開いて商売をしながら、原住民たちからコプラ（Copra）を収集した。

一方、黄永三はサタワル島に居住しながら、住民を動員してコプラを収集した。彼は住民らに殺害されたが、その後に土方久功がその島に入る。黄に関する資料は土方久功の記録を通じて確認できる。土方久功はそこに弟子と一緒に入って、コプラ収集商の役割をしながら、他方では民俗学者として、芸術家として作業を継続する。

高明黎と黄永三、両ケースは太平洋戦争以降に強制動員された朝鮮人たちと違って、自ら南

洋群島に行って商業活動に従事したケースだと考えられる。朝鮮人が南洋群島の島で事業で成功するためには、現地日本人社会の認定を受けて彼らのネットワークの中に入ってこそ可能なことだっただろう。

第 185 回　　2018 年 2 月 19 日

島外出産を経験した母親の妊娠期・分娩期における思いやニーズ―フォ―カス・グループ・インタビューを通して―

中尾優子・井上尚美
（鹿児島大学大学院保健学研究科）

日本は産科医不足や助産師の偏在化により、離島やへき地の周産期医療に携わる医療従事者の不足が顕著になっており、健診や分娩場所について妊産婦への負担が予想される。今回、島外出産を経験した母親にフォーカス・グループ・インタビューを行い、母親の思いやニーズを明らかにした。対象は、A 島に居住する島外出身者母親 6 名と島内出身者 4 名であった。分析の結果、17 のサブカテゴリーと【産科施設が無い島内で妊娠生活を送る大変さ】【家族の存在が大きいことへの気づき】【島外生活のやるせなさ】【付きまとうお金の心配】【この妊娠を守りたい】の 5 つのカテゴリーが抽出された。また、『島外生活の支援を充実させてほしい』『島内で産みたい』『妊婦健診時にアドヴァイスがほしい』『助産師に相談する機会が欲しい』『島と病院がより連携してほしい』の 5 つのニーズが抽出された。島外、島内出身者共に支援を強化していくことが必要であり、特に島外出身者においては、妊娠中の支援が必要であることが示唆された。島外出産を支援するために、島外での出産の情報の提供やピア・サポート・グループの利用など支援システムの充実が必要である。

中尾優子氏

研究会で奄美分室と Skype でつないでの討論風景

お知らせ

（1）着任

外国人客員教授として韓国・済州大学校の趙誠倫氏が 12 月 18 日に着任いたしました。研究テーマは「南洋群島における朝鮮人 : ヤップ島の日本人コミュニティと朝鮮人の適応戦略」、専門は「社会学」で、2018 年 3 月 19 日まで滞在予定です。

（2）河合センター長のサバ大学訪問

平成 29 年 11 月 20 日から 11 月 27 日まで、河合センター長はマレーシア・サバ大学小島嶼研究所から招待を受け、理学部濱田季之准教授と共とサバ大学を訪問した。理学部長や小島嶼研究所長等と共に、今後の共同教育・研究の打ち合わせや学生及び教員の人材交流などの話し合いを行い、来年度に新たな外部資金応募についての合意を得た。また、サバ大学の教員及び学生に鹿児島大学と本センターの活動について説明を行うとともに、サバ州北西に位置するマンタニ島における予備調査も行った。

写真左 : 小島嶼研究所における打ち合わせの様子（右から前熱帯生物保全研究所長チャールズ教授、前サバ大学教授ハルン教授、小島嶼研究所長ズールハリー博士、理学部長ババ教授、河合センター長、濱田准教授）

写真右 : サバ大学の教員及び学生に鹿児島大学と本センターの活動について説明を行っている様子

最近の出版物

南太平洋研究 (South Pacific Studies) Vol.38, No.2, 2018

Research Paper

SALI G.: Concerns and Challenges of Crime in Papua New Guinea

Review

MOUSOURAKIS G.: Health Care Services for the Elderly in New Zealand: a Critical Perspective on Current Policy and Practice

～フィールドこぼれ話～

「端島」であるということ―災害への対応力、災害からの復元力

佐藤　宏之（鹿児島大学教育学部）

2017 年 3 月、鹿児島大学島嶼研ブックレット『自然災害と共に生きる―近世種子島の気候変動と地域社会』を執筆させていただいた。本書は、種子島家に伝わる、江戸時代から明治時代にかけて編さんされた歴代系譜、年譜である『種子島家譜』を用い、寛永 14 年（1637）から明治 24 年（1891）にかけて、風水害（雨乞いを含む）、飢饉、疫病、地震・津波、火山噴火と、それに対する社会的応答に関わる記事 417 件を分析したものである。

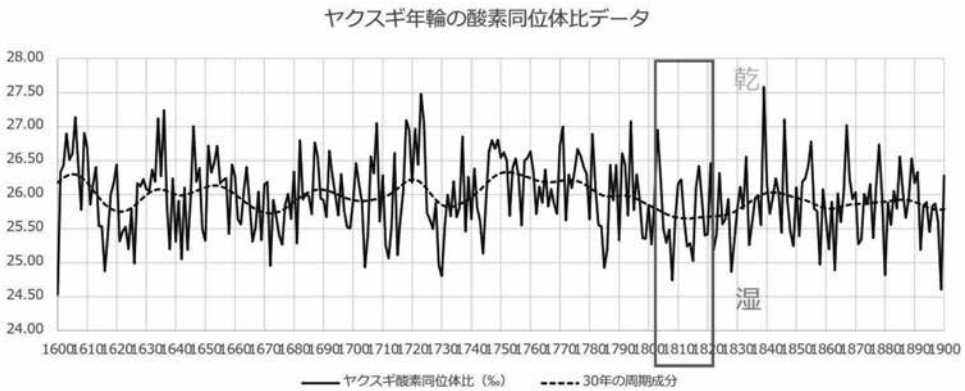
この『種子島家譜』では、種子島のことを表す「端島（列島の端の島）」がキーワードとしてたびたび用いられる。種籾が渡されなければ、「端嶋之儀調達之主便無之」（端島なのでそれを調達する方法がない）、「地方とハ相替リ、端嶋之事ニ御座候得者、外ニ稼方等之動キ一切無之」（陸地と異なり、端島なのでほかに収入を得るための方法が一切ない）、「端島ニ而格別之産物迚茂無御座」（端島なのでたいした産物がない）、「地方と相替り端嶋ニ而、銀銭之通融不自由之場所」（通貨の使用が不自由な場所）のように、種子島（島嶼地域）がもつ特質を示す語といえる。気候変動や経済システムの影響を受けやすい「端島」ゆえに、常に危機への対応、危機を予見した対応を迫られていた。

なかでももっとも被害が大きかったのが、文化元年・文化 2 年（1804･5）の飢饉である。蝗の発生によって 18 か村中 7 か村が無納となり、2 度にわたる台風によって塩がかかり作物に大きな被害をもたらされ、「大疫」によって多くの人命や牛馬の命が奪われた。それは「七拾年来無之大凶作」「無類之災殃」「誠ニ絶言語候災殃」「往古より無之事」といわれるものであった。

「ヤクスギ年輪の酸素同位対比データ」（樹木年輪に含まれるセルロースの酸素同位体比（酸素 18／酸素 16 の存在比）を用い、夏の降水量を復元したもの）をみると、高温で湿潤な気候であったことが知られる。東アジアにおいて、この時期は前後 200 年間でもっとも気温が高く、東北地方をはじめとする本州では温暖化によって好調な米の生産が続くなどよい影響をもたらしたが、南国の種子島では未曾有の飢饉が発生しているのである。

しかし、当時の人びとは災害に対しなす術もなくあきらめていたわけではない。危機に直面したさい、領主からの救済や援助を待つのではなく、民衆自らが危機に対応し、日常を回復・復元していった。そして、手広な土地があるという地形をいかして、災害に強いさとうきび栽培を主体的に選びとっていったのである。

わたしたちは、自然災害の発生自体を止めることはできないが、それによる被害を最小限に食い止めることは可能である。当時の人びとの知恵や努力に、歴史の教訓を学ぶことはできないだろうか。



「とうがらしに旅して」

第十六回　「酒と唐辛子の関係（一）餅麹」

宮迫治時さんのお宅を訪れると、酒と唐辛子の関係といわれても、あまりピンとこないかもしれない。唐辛子入りのウォッカのこと？ビールとトマトジュースを合わせたカクテル「レッドアイ」にタバスコを入れること？いえいえ、今回は酒造りに関するお話です。東南アジアの一部地域では、現在でも伝統的な製法で醸造しており、そのときに必要となるのが餅麹（へいきく、または、もちこうじ）である。餅麹を細かく粉状にし、炊いた（または蒸した）米に加えて混ぜ、それを壺などに入れて一定期間発酵させれば、米の醸造酒のできあがり。餅麹には様々な形状のものがあるとはいえ、わかりやすくいえば、鏡餅（の一段分だけ）のような形をしていることが多い。作り方も地域によって異なるが、基本的には「生米＋様々な植物片」を搗き、水などを加えて成形し、屋内に安置後、天日で干す。東南アジアの酒文化の詳細については『東方アジアの酒の起源』や『酒づくりの民族誌』をご参照いただくとして、なぜ唐辛子研究者が酒文化にまで手を伸ばしたのかというと、「様々な植物」の一つとして唐辛子が使われるからだ。しかも東南アジアの幅広い地域で。どうして新大陸起源の新参者の唐辛子を餅麹に使うのか？という単純な疑問から研究を開始したのだが、調べてみるといろいろと面白いことがわかってきた。カンボジアでの聞き取り調査の結果、唐辛子の果実を餅麹の材料に用いる理由は、その餅麹を使った醸造酒（・蒸留酒）が「クダウ（熱い）」・「ハル（辛い）」・「クラン（強い）」になるからであった。しかし、「辛く」感じるほどの量の唐辛子が餅麹に入っているわけではない。餅麹のその他の材料をみてみると、コショウやショウガ、肉桂など、辛いまたは刺激の強い旧大陸起源の植物が多かった。そのため、「旧大陸起源の香辛料を餅麹に利用するという技術に唐辛子が一つの要素として組み込まれたのではないか」という仮説を現在のところ私は立てている。仮説や研究の話はさておき、「HOT」な材料で作った餅麹を使って醸造すると、「HOT」な酒ができる、という説明は、なんだか妙に説得力がありませんか？（山本宗立）

編集後記

先日マーシャル諸島に調査に行きました。マジュロから船で外洋に出て、別の環礁に行く予定だったのですが、海が荒れていてなかなか船が出せませんでした。そこで、現地のカウンターパートがマジュロ環礁上の小さな島に連れて行ってくれました。そこには男性が一人で暮らしていました。何もない質素な生活は、寂しいというより、気ままな暮らしが少し羨ましく感じました。（大塚　靖）

島嶼研だより　No. 75　平成 30 年 3 月 23 日発行

発行：鹿児島大学国際島嶼教育研究センター
〒890-8580　鹿児島市郡元 1-21-24
電話 099(285)7394 ファクシミリ 099(285)6197
電子メイル　shimaken@cpi.kagoshima-u.ac.jp
WWW　http://cpi.kagoshima-u.ac.jp/index-j.html